

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	湯の香に包まれた家 : 詩歌
Author(s)	大島, たけし
Citation	龍南, 181: 90-91
Issue date	1922-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7852
Right	

湯の香に包まれた家

大島 たちし

浪の音のするごさを暮れては灯が赤し

谷深々と來し湯の香につゝまれて家家(霧島)

水車めぐらして湯は流るゝ旭まぶしう

沖は暗し潮の香の高きに淋しさね堪えず

干潟明るう蟹の穴には鉄あげたる蟹の仔よ

をみなよ岩を噛む波の音のよるかな

雨が咆に風が咆に家は小さな灯を掲げ(竹田町)

朝のしづけさ明るし味噌汁すゝるおと

友よ欠呻大きくひねひねと霧雨にぬるゝ

貸ボートの紅提灯やんはりと浪(別府)

月雲を出でし海の面ほのと魚がとびたり

船出でんとす汽笛に更けし人人

日はくろめける熱湯たんたと湧く音(海地獄)

山の静けさをひんやりと樹々の風の音かな

青空つきぬいて山の高さ聳れたれば(耶馬溪)

足音じんわり石の道には洩日這ふめり(羅漢寺)

蟲の音こうこうと河原の廣さ溢れて(柿坂)

提灯ぼつかりと生れ更けきはむ谷水

雨は谷より峰にふりきて嘶く馬馬(阿蘇)

霧を吸ひ霧を吐き山深き草の花かな

鳥しんからないてひつそりと山一杯の霧

紙鳶浪に落ちんとす夕日くるめけり

潮の香ほのぼのと朝の宿の夾竹桃

霧雨ふるにてランプ小さな山の驛

土の香ほのと粟ははげしき日に伸びたり